

南海トラフ全域における地震・津波観測監視体制の構築

政策提言先 文部科学省

政策提言の要旨

平成24年8月29日に内閣府が発表した「南海トラフの巨大地震による津波高・浸水域等（第2次報告）」によると、本県では最大津波高3.4m、津波高1mの海岸線への到達時間は最短で3分という、全国的に見て最も厳しい推計結果となりました。

この短時間で襲来することが予測されている津波から迅速に避難するため、以下の内容について提言します。

提言1：室戸岬沖の観測監視システム（DONET II）の早期完成

提言2：観測網の空白地帯である足摺岬沖～日向灘海域への早期着手

【政策提言の具体的内容】

○超広域で甚大な被害の発生が予測されるが、南海トラフにおける観測体制が不十分

- ・どこが震源となるのか予測不可能
- ・どこで大きな津波が発生するのか予測不可能
- ・足摺岬沖～日向灘海域は観測網の空白地帯

○南海トラフ全域における地震・津波観測監視体制の構築

1. 室戸岬沖の観測監視システム（DONET II）の早期完成
2. 観測網の空白地帯である足摺岬沖～日向灘海域への早期着手

【政策提言の理由】

文部科学省地震調査研究推進本部における長期評価において、30年以内の発生確率が東海地震について88%（参考値）、東南海地震について70～80%、南海地震について60%程度とされ、その切迫度は年々高まっており連動発生も危惧されています。

南海トラフ巨大地震は、超広域で甚大な被害の発生が想定されますが、南海トラフのどこで地震・津波が発生するのか予測することは不可能です。

さらに、足摺岬沖から日向灘海域のプレートはすべり込み量が大きく、かつ四国西南部及び九州東部に短時間で大きな津波が到達することも予測されています。

しかしながら、足摺岬沖から日向灘海域は地震・津波観測網の空白地帯となっており、甚大な被害が想定されるにもかかわらず、地震発生の検知が遅れる可能性があります。

そのため、足摺岬沖から日向灘海域に観測網を整備し、南海トラフ全体での観測体制を構築することで、南海トラフのどこで地震・津波が発生したとしても、即時に検知できる体制を構築することが必要です。